

# 「サイバーパンクのデザインを用いた、 未来の生活様式とそこでの個人装備の考察」

2020年は大きな変化の年となりました。

世界的なパンデミックを発端とした生活様式の変化、都市のロックダウン、その中で起こる異常気象による災害など、暗いニュースが連日流れて行きました。そんな中で卒業研究や就職活動を迎えるにあたり、「この不安や焦燥感を創作の原点に出来ないか」と考えたのが今回の研究の始まりです。

そして2020年はディストピアを題材とした作品、

とりわけサイバーパンクをモチーフとした映画や漫画、ゲームの記念となる年でもありました。

サイバーパンクの金字塔『AKIRA』（大友克洋）の舞台は東京オリンピック開催を2020年に控えた東京、

2020年のゲーム市場を賑わせた『サイバーパンク 2077』（CDPR）の原作『サイバーパンク 2.0.2.0』は2020年が舞台です。

このような状況が重なり、陰鬱な社会を描く「サイバーパンク」を支点として

2020年から見た未来の生活様式を考察するというテーマに行きつきました。

過去のサイバーパンクの作品は、それぞれが創作された年代から見た「未来観」が多分に含まれています。

そこで、2020年に生きる人間だからこそ考えられるサイバーパンクもあるのではないかと考えました。

また温暖化や異常気象などは、防ぐ為、被害に遭った際に身を守る為に、現状を調べて考える事が重要です。

そのきっかけを作るという意味でも、サイバーパンクというキャッチーなイメージで考え、提示する手法を選択しました。

私の作品をご覧になられた皆様の、未来へ思考を巡らせる機会の一助になってくれると嬉しく思います。

## 舞台設定

### 「2099年の東京都」

温暖化による短期間の豪雨と、海面上昇、2050年代に起きた直下型地震での液状化、地盤沈下の影響を受け、

旧東京都は墨田区や江戸川区を始めとする東側半分がほぼ水没または冠水している。

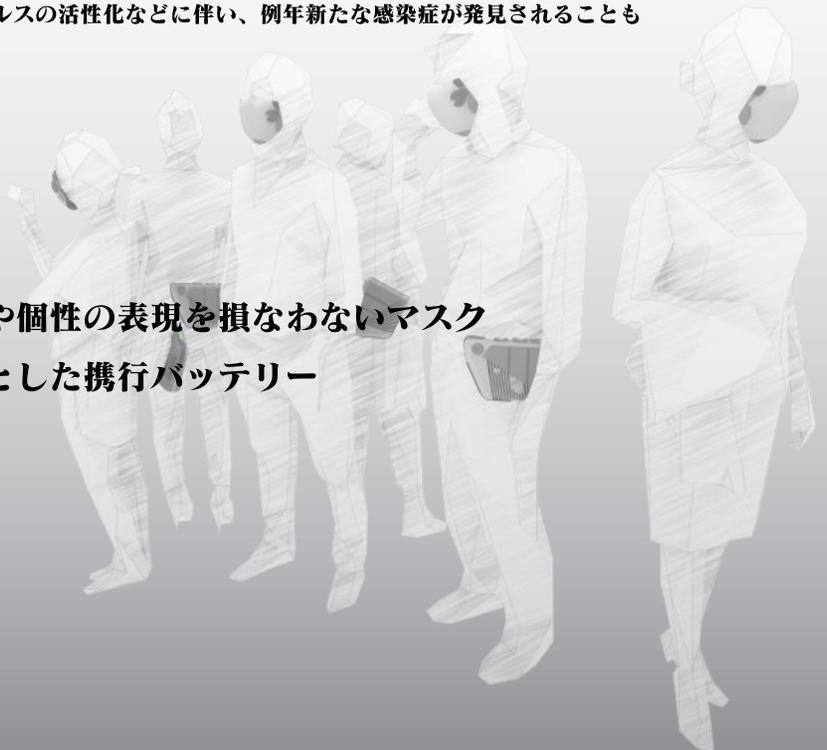
公共のライフラインは相次ぐ災害の中従来の信頼性や安定感を失いつつあり、自助による防災が基本となっていく。

また気象パターンの変化による生態系の乱れ、氷河内のウイルスの活性化などに伴い、例年新たな感染症が発見されることも問題となっている……。

## 作品概要

### 以上の世界観における個人装備の考察

- ・ 常時付けていてもコミュニケーションや個性の表現を損なわないマスク
- ・ 個人単位でのライフライン構築を目的とした携行バッテリー



## 可変ディスプレイ内蔵マスク

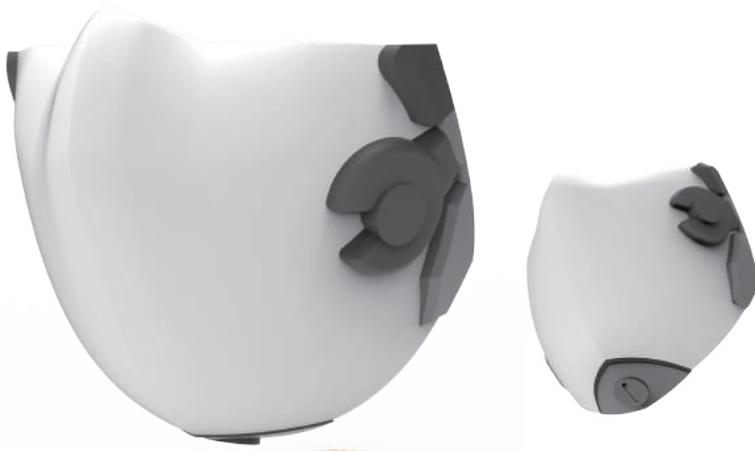
温暖化に伴う気候変動などを原因とした感染症の拡大への対策の1つとして一般的になった、サーキュレータを内蔵したフィルター交換式のマスクの1つ。

内蔵バッテリーや外部電源からの電力供給により稼働する。空気を右側のフィルターからマスク内に通し、顎部分から排出することで循環させる。

顎部分のラインにはスピーカーが内蔵されており、任意で使用者の声を増大させることが可能。

マスク正面の大部分は薄型のディスプレイになっており、マスク内側のセンサーを通した着用者の口元、それを基にした任意のパターン等を映すことができる。これらの機能は主にコミュニケーションの円滑化やプライバシー保護を目的としている。

また、呼気を分析した上で異常が検知された場合、救急サービスへ接続するモデルも存在する。



## 携行型個人電源装置

災害の多発によるライフラインの信頼性低下に伴い、個人が自身のライフラインを担保する為に設計された。

耐変形、耐熱、耐圧力に優れた水系リチウムイオンバッテリーを採用し、電圧を保ちつつ小型化に成功している。

また、水を媒体として使用している為、発火原因とならない。有線、無線の双方での電力供給に対応し、後述のマスク等の携帯端末の電源としてはもちろん、電気自動車への一時的な電力供給なども可能。

充電方法は一般的な家庭用電源や太陽光、靴裏、衣服の肘膝等の可動部に仕込む小型発電機、生体等からなど様々。裏面には衝撃感知型と水圧感知型のエアバッグを搭載し、災害時や緊急時の被害から対象者を保護する。

